

[学習指導一般]

学び合い・深め合いを促すコミュニケーション能力を育む取組

秋山 敦子*

1 はじめに

新学習指導要領が全面実施されてから二年余りが経過した。この間、「生きる力」を育てようとして、自ら学び、自ら考える力の育成や、基礎基本の定着を目指して日々の学習指導に取り組んでいる。中でも、国語科改訂の柱の一つとなっている「伝え合う力」の育成については、できるだけ多くの機会をとらえて実施しようと取り組んできた。小学校学習指導要領解説「総則編」で述べられているように、伝え合う力は「教科の枠にとらわれず学校教育全体の中で実施していく」¹⁾ ことで生きてはたらく力となっていくのだと考えているからだ。

また、新学習指導要領で示された「伝え合う力」はコミュニケーション能力そのものだととらえている。「伝え合う」という時、そこには伝える側と聞く側が存在している。これまではどちらかというところ「伝える」ことに目がいきがちであったが、伝えることをしっかりと受け止めることのできる聞き手の存在を抜きにして「伝え合う」ことは考えられない。『伝えることと受け止めることがお互いにできてこそ「伝え合う」ことが成立する』²⁾ のであり、共によりよい考えを求めていこうとする互いの存在があってこそ伝え合う活動が充実していくのである。

2 テーマ設定の理由

(1) 双方向のコミュニケーション能力

上述したように、「伝え合う」ことは伝えることと受け止めることが互いにできてこそ成立する。つまり、コミュニケーション能力を育成していこうとする時、伝える側と聞く側（受け止める側）双方の高まりを目指すことが重要となるのである。しかしながら、これまでの取組を振り返ってみると、コミュニケーション能力が発揮されるべき学習の場で、発表方法やまとめ方、話し方など「複数の聞き手を相手とした一方通行的な伝える学習に重点が置かれすぎていた」³⁾ のではないだろうか。そのため、子どもも発表することを終着点ととらえ、自分が発表し終わった時点で満足してしまうことが往々にしてあった。また、話し合い活動でも、互いの意見を述べたり質問したりする姿から、一見コミュニケーションが成立しているように見える。しかし、実際は自分の考えを伝えるだけのやりとりであったり、一問一答で終わる互いにとって深まりや広がりのみられない質問であったりすることが多いのではないか。こうした状況から脱却するために、相手を理解し受け止めることのできる聞き手の存在が重要になる。『「聞く」ことは単に相手の話に耳を傾けるだけでなく、そのことばの背景までも知ろうとすること』⁴⁾ ではないだろうか。そうやってこそ相手を理解することができ、コミュニケーションが成立するのである。伝える側と聞く側で互いの多様な考えを交流させ、そこからよりよい考えを求めていこうとする、双方向のコミュニケーション能力の育成が大切である。

(2) 生きてはたらく力に

伝え合うことに重点を置いた国語科の実践は多い。しかし、コミュニケーション能力の育成を目指そうとするとき、国語科の学習の中だけでなく、各教科や総合的な学習の時間など、教育活動全般の中で伝え合うことを意識した学習活動を組み入れていくことが大切である。これまでも総合的な学習の時間や各教科の学習の中で、目標や内容面で相互に関連があれば、指導時期を考えたり、題材の取り上げ方を考慮したりしながら活動を展開してきている。しかし、それが単発的な取組であることも少なくない。コミュニケーション能力の育成に当たっては、自分の考えや思いを伝え合うという活動を繰り返し行うことで、より効果が期待できるはずである。年間を通した着実な学習活動の積み重ねのもとで、子どもはコミュニケーション能力を確実に身に付け、生きてはたらく力としていくと考える。

* 新潟市立山の下小学校

3 研究の目的

コミュニケーション能力は、子どもがことばを使って自分の思いや考えを交流させるその瞬間瞬間をとらえて育成されるものである。また、そうした取組が継続されることで、確かに子どもの身に付いていく。従って本研究は、子どもがコミュニケーション能力を高めながら学ぶ姿の集積と、その要因の分析を通じた指導法の改善を目的とする。

4 研究の方法

集積した子どもの学ぶ姿から、コミュニケーション能力を育む学習活動を組織していく上で重要な構成要因の分析を行う。その際、次の点に着目する。

- (1) 子どもの中にコミュニケーションを成立させる技能が身に付いているか。
- (2) 自分のことばによるコミュニケーションで、相互の意志疎通が図られているか。

5 学習活動の実際

(1) 対話を通して学ぶ子どもの姿

一人一人のコミュニケーション能力を高めるために、相手の反応を直に感じながら話したり聞いたりする「対話」を学習に組み入れていくことにした。対話の基本は一人対一人で相手とじっくり向き合うところにある。しかし、学習によっては、3～4人のグループになり対話を行うことも考えられる。また、自由に相手を変えながら主体的に対話を進めていく方法など、ねらいに沿った形態を工夫しながら実践していくことも必要であろう。

① 情報交換しながらコミュニケーション技能を身に付ける

社会「大昔の暮らしをのぞこう」の単元では、各自が興味・関心をもった事柄や人物などに焦点づけた調べ学習を行い、その後に対話を行った。

対話を始めるまでに、自分が調べてきたことや得た知識に基づく自分の考えを文章でまとめるよう指示し、話がしやすいように準備をさせた。

対話を行うに当たっては、次のようにやり方を示した。

- i) どちらかが自分の調べたことを紹介する。
- ii) 聞き手は、メモを取りながら聞く。
- iii) メモを基に、質問や意見の交流を行う。(意見のやりとりが続くように)
- iv) i) から iii) を繰り返す。

調べた事柄や人物が共通する友達と対話を始め、できるだけ多くの人と対話するよう自分で相手を見つけながら活動に取り組みさせた。最初はぎこちない様子で対話を始めた子供たちも、一人目の友達との対話を終える頃には雰囲気をつかみ、スムーズに対話相手を見つけながら活動を進めていくことができた。

…略…本当に蘇我氏はひどい人だと思います。自分のために他の人を殺してしまうなんて考えられません。ここで立ち上がったのが、中大兄皇子と中臣鎌足です。二人は後に蘇我氏を滅ぼし、新しい政治を始めます。これが大化の改新です。私は大化の改新が起こって本当によかったと思います。大化の改新が起らなかったら日本の歴史も大きく変わり、今よりも悪くなっていたと思うからです。(中略) 中大兄皇子は、真っ先に自分のもっていた土地と人民を国に差し出したといいます。私はこれを知ってすごく驚きました。それと同時にこんなにたくさんの人民をまとめることができる中大兄皇子は本当にすごい人物だと思います。

Hさんのまとめ

…略…太子の天皇中心とした努力が無駄になったのだと中大兄皇子と中臣鎌足が暗殺したらしい。私は、偉い人は、天皇になったりすると自分勝手な人たちが出てしまい、暗殺されるという悲しいことになってしまふんだなと考えた。中大兄皇子と中臣鎌足は自分に批判的な豪族や聖徳太子の皇子を攻撃し、自分たちの仲間しかいないようにしてしまったのでびっくりした。今の時代、自分の味方しかいないことなどあり得ないことなのに、二人はすごい力をもっていたんだと思う。私は最初、中臣鎌足と中大兄皇子はすごい人だと思ったけど、今はこの二人はともつまらない生涯をおくったと思います。なぜなら、みんなの意見がまとまりすぎて、手応えがないからです。

Tさんのまとめ

〈資料1〉 Hさん、Tさんの対話前のまとめ

HさんとTさんは、共に大化の改新について調べ学習を進めていた。その中で二人のとらえには〈資料1〉のような違いがみられた。対話の中で、どのような意見のやりとりが行われるのかに関心を向けていた。

二人の対話は、和気藹々としながらも、じっくりと進んでいた。互いの調べた内容と考えを聞き、自分との違いを目の当たりにしたことで、なぜそのような違いがあるのか驚きを隠せないようだった。Hさんからは「すごい人だと私も思うが、つまらない生涯とは思わない」「つまらない生涯についてもっとくわしく聞かせてほしい」といった意見や質問が出された。Tさんもそれに答えながら「いろんな考えの人がいて話し合うことでよい考えが生まれる」という自分の考えに基づいて、白熱したやりとりを展開していた。対話を終えた二人のまとめは次のようであった。

Hさん……Tさんは皇子と鎌足はみんなの意見がまとまりすぎて手応えが感じられず、残りの生涯をつまらなく過ごしたと考えたけれど、私の考えは逆で、みんなの意見がよくまとまって、手応えを感じ気持ちよく生涯を過ごしたと思う。自分では思いもしなかった考えを聞いてよかったです。

Tさん……私は、Hさんが大化の改新で感じた「大化の改新をしなかったら日本の歴史が悪くなっていた」という考えには、同じく感じる場所もあるし、逆に違うと感じる場所がありました。同じところは、中臣鎌足と中大兄皇子が大化の改新で蘇我氏をほろぼすことはすごいけれど、私は、日本の歴史がそのときだけ変わっても、私たちのいる時代までは変わらないと思いました。なぜなら、自分に批判的な人たを排除していっただけでは本当のよい政治は行われなと思うからです。

この対話の場面では、対話に不慣れながらも相手の考えを聞き出そうと積極的に質問する姿や、自分の考えを分かってもらおうと一生懸命に伝えている姿が、他の子供たちにも見られた。全体としては、HさんとTさんのように調べた内容が共通している方が、内容面での広がりや深まりのある対話が行われたようである。相手の調べた内容や考えについて、より深まりのある対話を押し進めるには、対話そのものに慣れ親しみ、対話から得られるよさを実感しながら質問や意見をやりとりする対話の技能を高めていく必要がある。

② 他者の考えにふれながら、自分の考えを確かにしていく

1学期の総合的な学習の時間は、佐渡の歴史や文化、暮らしなどについて調べたり、体験したりする中から、佐渡のよさをとらえていくことを活動のねらいとしていた。ここでは、各自の興味・関心に基づく調べ学習と佐渡自然教室での体験活動を通して、一人一人が自分が獲得した「佐渡」に対する思いや考えをまとめる過程で、対話学習を行った。対話に入る前に全員のレポートを読み、聞きたいことや意見交換したいことをメモした状態にしておいた。そのため、それぞれの考えを紹介しあう時間を省くことができ、実質的な対話がより多くの相手と交わされた。また、事前に書いたメモがあることは、限られた時間の中で効率よく対話を進めていくことにつながったようだ。

Iさんは対話後、次のように書いている。

私は今日10人の人と対話しました。今まで、佐渡の人たちの「愛情」をただ「やさしい」としか思いませんでした。だけど、友達の意見を聞いて、佐渡の人たちは新潟の人より「やさしさ」と「安心感」をもたらしてくれるのだと考えが変わり、強くそうなんだと感じています。

友達との対話により、Iさんは、それまで考えていた「佐渡の人々の愛情」が単に「やさしい」という言葉と置き換えられるようなものでなく、「安心感」までも与えてくれるということに気付いている。このことから、自分と異なる考えにふれることによって、自分の考えが深まっていったことがわかる。また、佐渡の人たちだけを見つめるのではなく、新潟の人たちと比較して考えるという新たな視点を獲得していることも分かる。「強くそうなんだと感じている」という言葉からは、対話を重ねるなかで自分の考えを確かなものにしていったことが推察された。

Yさんは次のように書いた。

ぼくは友達と対話してなぜかと思ったことがあります。それは、「都会ではわからないことは聞けないが、佐渡では初めての人でも安心して聞ける」ということです。ぼくは、都会や佐渡でも普通に聞けると思いました。でもよく考えると、都会は人が多くてだれに聞けばいいか迷うけど、佐渡ではお年寄りが多くとても安心して聞けそうだなと思いました。それに、佐渡の人たちは心温かい人ばかりなのでまた安心できるんだなあと思いました。

「ぼくは普通に聞ける」と自分の考えを明確にもちながらも、Yさん自身の考えとは異なる考えを素通りすることなく、立ち止まって考えてみている。それまでYさんは、自然のすばらしさのみをとらえていたのであるが、ここで立ち止まり、考えたことによって、「人の優しさ」をもとらえることができたのである。

(2) 自己評価を対話に生かす

対話した後は必ず自己評価を行った。〈資料2〉

- ・自分の考えをしっかりと相手に伝えられたか
- ・相手の話をしっかりと聞くことができたか
- ・相手の考えを聞きながら、さらに自分の質問や意見が言えたか
- ・相手の質問や意見にきちんと答えたか
- ・今日の話し合い活動でよかったことは何か
- ・今日の話し合い活動で困ったことは何か
- ・次回の話し合い活動をより上手に行うために気をつけたいことは何か

という内容を、5段階評価と記述によって振り返っていった。数値にして振り返ることで、自分自身の対話への取組に対する意識を鮮明にすることができ、3であったところは次回4になるよう頑張ってみようといった意欲を喚起することにつながった。

記述部分には次のような点が挙がってきた。

- ・相手の話をよく聞く。
- ・はっきりと聞こえる声で話す。
- ・相手に分かりやすいように工夫して話す。
- ・自分からどんどん質問して、謎が残らないようにする。
- ・質問の答えに対して、自分の考えをもつことが大事。そうしないと話がそこで終わってしまう。
- ・聞かれたことにははっきり答える。わからなくても「わかりません」「調べておきます」のようにしっかりと答える。
- ・「〇〇ということについて、□□さんはどう思いますか。」という質問の仕方をしてもらったので真似したいと思った。
- ・質問される内容が似ていることが多かったので、もっとくわしく調べたり、まとめたりしておけばよかった。

これらの内容は子どもに提示し、全員で考えられるようにした。そうしたことで、コミュニケーションスキルを意識しながら、対話に取り組んでいる子どもの姿が見られるようになった。

6 研究のまとめ

これまで対話学習を取り入れた実践を進めながら、コミュニケーション能力を發揮し、伸長させる子どもの姿を探ってきた。そこから以下に述べる三点を、子どもがコミュニケーション能力を育んでいく活動構成の要因としてとらえた。

(1) 対話を重視した活動展開を図る

相手の反応を直に感じながら話したり聞いたりする「対話」を学習活動に取り入れることで、子どもは次の力を培っていくことができた。

① 言葉を受けて返す態度と技能

前章(1)の①で紹介したHさんは、自分とは異なる考えを語るTさんに対し「自分はAについては同じ考えだが、Bについてはこう思う。Bについてのあなたの意見をもっと詳しく聞かせてください。」と対話を進めていった。ここでのHさんは聞き手であり、相手の話す内容を正しくとらえ、受け止めることが求められる。自分の考えとの共通点と相違点を明確に示し、その上でもっと詳しく聞きたいことを質問しているところから、HさんがTさんの意見をしっかりと受け止めていることが分かる。また、相手の話を鵜呑みにすることなく自分の考えと照らしながら聞き、異なる点やよくわからない点については適切な言葉と態度で相手に返していこうとするHさんの姿が見てとれた。自分の考えをしっかりとって相手の話す内容を聞くことも大切な技能といえる。

総合アンケート		アンケート	
月 日 名前		月 日 名前	
1	相手の質問や意見が答えられたか	1	自分の考えをしっかりと相手に伝えられたか
	5 ④ 3 2 1		5 ④ 3 2 1
2	相手の考えをしっかりと聞くことができたか	2	相手の考えをしっかりと聞くことができたか
	5 ④ 3 2 1		⑤ 4 3 2 1
3	相手の考えを聞きながら自分の質問や意見を言えたか	3	意見を聞きながら疑問に思うことやもっと詳しく聞きたいと思うことがありましたか
	④ 4 3 2 1		5 4 ③ 2 1
4	相手の質問や意見にきちんと答えたか	4	相手の質問や意見にきちんと答えたか
	5 4 ③ 2 1		⑤ 4 3 2 1
5	今日の話し合い活動でよかったことは何か	5	相手の質問や意見にきちんと答えたか
	5 4 ③ 2 1		⑤ 4 3 2 1
6	今日の話し合い活動で困ったことは何か	6	今日の話し合い活動でよかったことは何ですか
	5 4 ③ 2 1		自分がよく考えに思っていることを質問できなくて話し合いはいいなと思いました。
7	相手の話をよく聞く。	7	今日の話し合い活動で困ったことは何ですか
	5 4 ③ 2 1		相手の話をよく聞くと、質問もできなくて、おぼろげに思いました。
8	はっきりと聞こえる声で話す。	8	今日の話し合い活動で困ったことは何ですか
	5 4 ③ 2 1		思ったこともお話しできなくて、聞いてのでも少し、おぼろげなことを入れた方がいいと思いました。

〈資料2〉

月	国語 (175 書写31含む)	社会 (100)	総合的な学習の時間 (110英語活動15含む)	他教科及び教育活動全般
4	・命とふれ合う(8)	〈大昔の暮らしをのぞこう(15)〉	・探ろう、佐渡に暮らす人々(30)	
5	・問い合わせの手紙(5) ・短歌・俳句を味わおう(4)	歴史新聞づくりを通してわかったことを紹介する中で、内容の理解が深まるよう対話のスキルを培う。	佐渡についての情報や自分の思いをまとめる過程で対話を進め、自分の考えを確かにしたり、広げたりしていく。	朝学活でのスピーチに質問タイムを設け実施。
6	・似ている漢字(1) ・筆者の考えと事実を読みとろう(5) ・敬語の使い方(2) ・効果を考えて書こう(10)	〈武士の世の中をさぐる〉(25)		
7	・作品と出会う作者と出会う(16)	信長・秀吉・家康の三武将について調べたことを、対話のスキルを生かしながら紹介し合う。		学級会に対話のスキルを生かし、話す、聞く活動の活性化を図る。
9	・同じ訓をもつ漢字(2) ・あいたくて(2) ・漢字の読み方(1)	江戸時代の暮らしについて調べ、考えたことを基に対話し、考えを深める。	・新潟、再発見！(40)	
10	・学級討論会をしよう(5) ・話し合って考えを深め、意見文にまとめよう(11)	〈新しい日本の国づくりを見つめよう〉(12)	活動の節々で対話を行い、新潟について調べたことや郷土に対する思いを交流させながら、自分の考えを確実にしていく。	理科 人と自然とのかかわりについて調べ、対話のスキルを用いて自分の考えを深める。
11	・生き方や考え方を読みとろう(6) ・日本で使う文字(2) ・目的に応じて書こう(5)	「海のいのち」を読みとり考えたことを、対話を通して確かめたり深めたりする。		
12	・漢字の形と音・意味(2) ・言葉と文化について考えよう(12)	〈戦争から平和への歩みを見直そう〉(17)	・新潟に生きる私(25)	家庭 近隣の人々との生活について考え、住みやすくするために自分のできることを対話を通して考える。
1	・漢字辞典を使って(2) ・わたしの六年間(7) ・送り仮名(2)	各自の視点から戦争について調べたことをもとに意見文を作成し、それについて対話し考えを深める。		
2	・感動を言葉に(6) ・熟語の成り立ち(2)	〈暮らしと政治を調べてみよう〉(11)	国語と関連させながら、伝えたいことをまとめる過程で対話を進め、考えを確実にしていく。	
3	・伝えたい何かを見つけよう(14) ・覚えておきたい言葉(2) ・自分で選んで(10)	〈世界の人々とのつながりを広げよう〉(20) 対話のスキルを生かして、世界の人々とのつながりについて考えを深める。		

〈資料3〉

*実線枠は年度当初の計画、波線枠は追加計画

② 相手の考えのよさを認め、よりよい考えを求めようとする態度

いろいろな考えをもつ子どもが自分の考えをもちよって対話することで、多様な価値の存在や相手の表現のよさに気づき、触発されて自分の考えを深めることができた。これは、前章(1)の②で述べたIさんとYさんの姿から言えることであり、対話する双方に相手の考えを受け止め、理解しようとする意識があつてこそ見られる姿である。Iさんは、それぞれの考えをもつ10人の友達との対話から、愛情という一つの言葉の中にいくつものとらえがあることに気づき、自らの考えを深めていった。Yさんは、対話を通して新たな考えや視点に出会い、それまで気付くことのなかった「人の優しさ」について考えるようになった。こうした子どもの変容は、相手の賛同やプラス評価を得ることで、より促される。自分の考えに自信をもったり、共に学ぶ楽しさを感じたりすることに繋がるからである。

以上の点から、対話学習を組み入れていくことは、双方向のコミュニケーション能力を育成する上で有効であると

考える。

(2) 自己評価の場を重視する。

自分の学びの意識化を図る「振り返りの自己評価」を継続して行った。ここでの自己評価は、活動を数値に表したり、文章で書き表したりしていく。子どもにとっては、1時間の学習の中での自分を振り返ることであり、自分の考えや思いを確かにする場となった。前章(2)で示したように、コミュニケーションのスキルに関する気付きや反省が多かったことから、相手に分かりやすく伝え、理解してもらいたいという意識の高まりが見てとれた。また、それらは次の対話に向けた準備に生かされ、表現の仕方を工夫する子どもが多く見られるようになった。こうしたことから、コミュニケーション能力を伸長するための自己評価の内容や方法を、さらに工夫していきたいと考える。

(3) 年間を通して対話学習を位置づけ、学習の場を広げる。

年度当初、対話学習を重視した単元を構想・実践することで、子どものコミュニケーション能力の育成を図ろうと考えた。その際、年間を通じて繰り返し対話学習の機会を設定していくことで、よりコミュニケーション能力を伸長させ、確かな力として子どもに身に付けさせることができると考えた。そこで、年間指導計画を見直し、教科間での実施時期を考慮した上で〈資料3〉のように国語、社会、総合的な学習の時間の中に対話学習を位置づけた。

しかし、実際に実践を始めてみると、単元の学習の中から活動に広がりが出てくるようになり、コミュニケーション能力を発揮したり伸長したりする場を書き加えていくこととなった。それが〈資料3〉の中の波線で囲まれた活動である。当初の計画に固執することなく、計画を手直ししながら実践を進めていくことで、子どものコミュニケーション能力を発揮する機会が増え、日常化に結びついていくことになった。最初に述べたように、「伝え合う力」の育成は学校教育全体の中で取り組んでいくことが大切である。その点からも、日常化につながる学習の場の広がりも期待される場所であり、コミュニケーション能力を育む上で重要な要因といえる。

7 今後の課題

以上、研究のまとめとして、子どもの学ぶ姿からとらえられたコミュニケーション能力を育む活動構成の要因について述べた。これらを踏まえて、さらにコミュニケーション能力の育成に努めていきたい。

しかしながら、ここで忘れてならないことがある。それは、コミュニケーションスキルの習熟に関する個人差の問題である。一律的な指導をしていくだけでは、個人差がさらに広がっていく結果を招きかねない。また、コミュニケーションは、相手との信頼関係が成り立ってこそ円滑に進められるものである。子ども相互が温かくかわっていき学級づくりを心がけるとともに、一人一人の個性や個人差に着眼し、それぞれに応じた支援のあり方を工夫して働きかけていくことが不可欠であると考えている。

注

- 1) 小学校指導要領解説 総則編 文部省 1999年, p.73-74
- 2) 岡田定之「かかわり合いので相手意識を持たせる」『子どもと創る「国語の授業」』, 東洋館出版社, 2001年, p.2-3
- 3) 青山由紀「ワークショップを手立てとした対話学習」『子どもと創る「国語の授業」』, 東洋館出版社, 2001年, p.14
- 4) 岡田定之 前掲2) のp.3